



長谷寺かわら版

# 百日紅

91号

2015 (平成 27) 年  
1月1日

## 菩薩の話 (後篇)

あけましておめでとうございませう。今年もよろしくお願ひします。

前号に引き続き、菩薩の話です。菩薩は仏教の思想的展開の中で生まれた存在で、当初は悟りを得るまでの釈迦のことでしたが、やがて悟りを求める存在はすべて菩薩と呼ばれるようになります。ですから、出家して僧侶になることは、悟りに至る必要条件ではなくなりませんでした。

求めれば誰でも悟りを得られる。誰でも仏の世界に行ける。そういう教えに変身した仏教の

思想家たちは、この新しい

教えを「大乘だいじょう仏教」と呼

びました。教えを、悟りを

求める大勢しゅうじょうの衆生を収容で

きる、大きな乗り物たぐに譬え

たわけです。

### ☆菩薩の修行

悟りを求めるのが出家者

に限らないとなると、これ

までの、厳しい戒律を守

り、ひたすら瞑想にふける

という、出家前提の修行方

法は、根本的に考え直され



こちらがうちの本尊 十一面観世音菩薩

なければなりません。こうして、在家信者のまま、いわば誰にでもできる、日常生活を基盤にした修行方法が考え出されます。これが六波羅蜜行ろくはらみつぎぎょうと呼ばれるもので、布施、持戒じかい、忍辱にんじやく、精進しじょうじん、禪定ぜんじょう、智慧ちえの6種類の修行のことです。

このうちもつとも容易な修行が、布施ということになっていきます。お坊さんに布施をするという、これまでは善行と考えられていた行為が、布施の対象がすべての存在に広がり、悟りへのひとつの方法として位置付けられました。むろん布施とて修行ですから、実際に行うとなると、そう容易であるはずがありません。

六波羅蜜行については、ここではこれ以上詳しい話はありません。菩薩の誕生によって、修行のやり方まで変わったということをご理解下さればいいです。

### ☆菩薩の階梯かいてい

さて、菩薩がそういうものなら、菩薩の中には、生まれたばかりの菩薩や、未熟な菩薩も大勢いることになります。むろん、ある程度修行を重ねた菩薩たちもいれば、弥勒菩薩のように、悟りの一歩手前まで修行を積んだ菩薩もいるわけです。つまり、修行の程度によつて、さまざまなレベルの菩薩たちが存在することになります。悟りを得た仏とは違い、菩薩には階梯があるわけです。

ある經典によると、悟りに至るまでには、52もの段階があるとされています。菩薩は、修行を重ねて、それを一段一段登って行くわけです。時間がかかるはず

です。私は一体どのあたりにいるのでしょうか。それほど高い場所でないことだけは分かっていますけど。高いステージにいる菩薩

は、すでに多くの修行を積み、一切の衆生を救う努力を続けています。釈迦の前世がそうであったように、菩薩たちにとつてみれば、衆生を救うことも修行に他ならないわけですから。

代表選手の弥勒菩薩は、兜率天という、この世界の世界にいとされますが、我々の住むこの世界で修行をしている菩薩たちもいるはずですよ。

その、いまこの世界にいて、あるいはこの世界にやつて来て、衆生の救済をしている、その代表選手が観音菩薩であり、さらに文殊、普賢、地藏などの菩薩たちが生み出されます。ところで、私たちが日ごろ拝んでいる、観音さんやお地藏さんのような名のある菩薩たち。彼らとて、私たちと同じように悟りを求めていているわけですから、仏よりもはるかに身近な存在

です。身近というより、むしろ菩薩という意味では、悟りを求めている私たちと同じ立場、いわば同志です。しかも長い修行を積んでいするため、衆生を救う能力も兼ね備えている、とても頼りになる大先輩ということになります。

仏でもないのに「仏像」として拜まれている菩薩たちは、ほかでもない、これらステージの高い菩薩たちです。このような、信仰の対象とされている名のある菩薩たちを、私たちのような「誰でもなれる菩薩」と區別して、大菩薩と呼ぶこともありません。

### ☆仏と菩薩の役割分担

さて、菩薩、とくに観音や地藏といった。パワフルな菩薩たちが生まれたことで、仏と菩薩の役割分担が生まれます。仏たちのルーツはお釈迦さんですから、まずもって仏は、教えを説

く存在です。実際に人々の願いを叶え、救うのは、菩薩の仕事とされます。經典によって違いはありますが（これが仏教の難し

くもまたアバウトなところですが）、たとえば観音菩薩は、普段は極楽浄土で阿弥陀仏のもとで修行をしています。しかし「人々が救いを求めれば」、あるいは「観音」という名前そのままに「（救いを求める）音（声）が観えたら（聞こえたら）」、私たちの世界にやって来ては、相手によって姿を変えて、衆生を救い導くとされます。

仏像としては、むろんうちの本尊さんのように、お独りだけでおわす場合も多いですが、勢至菩薩とともに阿弥陀仏のそばによりそい、その両脇をかためていることも少なくありません。世に「阿弥陀三尊像」と呼ばれるのがこの様式の

仏像です。

他でもない、善光寺の本尊がこの様式。善光寺の仏像といえば、初めて日本にやって来た仏像。歴史の授業で教わった、あの仏教伝来のときのものだというのが、善光寺さんの縁起の語るところです。

阿弥陀三尊の場合は、観音菩薩が阿弥陀の慈悲を、勢至菩薩が智慧を象徴していると考えられます。

阿弥陀仏のそばにひかえる観音さんにもそういう姿のものがありますが、とくに臨終の場に極楽から迎える場面を描いたとされる「阿弥陀聖衆来迎図」では、観音さんは、死者を乗せるための蓮の花を、両手で捧げ持っています。

釈迦仏や薬師仏を中尊とする様式の三尊像もあり、この場合、釈迦仏の場合は文殊と普賢の両菩薩が、薬師の場合は日光・月光の両



蓮の花を捧げ持つ観音菩薩

菩薩が両脇をかためる場合が多いです。ここにも、仏と菩薩の役割分担が見られます。

### ☆例えば観音さんのこと

ところで、いわゆる大菩薩、たとえば観音菩薩は本当におわすのか。もしかしたらみなさんにとっては、これが最も関心のあることかもしれません。

前号の最後に、日本に伝わったのは、インドで生まれた仏教が、思想的に新たに展開した、大乘仏教と呼ばれる教えで、多くの仏たちははじめからおわすものでした、という話をしました。菩薩たちもその大乘仏

教の中で生まれました。だから日本仏教は、これまで縷々述べてきたような、教えの中から新たな仏や菩薩たちを生み出すという経験をしませんでした。

しかし、仏教が庶民に広まるにつれ、ことに観音菩薩をめぐっては、数々の靈驗譚が生まれ、また靈場が創られました。畿内近国に点在する33か所の観音靈場は、最も歴史の古い霊場です。庶民たちは次第に、經典や縁起に記された観音菩薩の不思議な力を信じ、頼るようになります。

その観音菩薩の靈驗譚のひとつに、おなじみの「わらしべ長者」があります。この話は、拾った稲藁を、ミカン、馬などと次々に交換し、物々交換で金持ちになつたなどという安直な出世話ではありません。観音さん、それもうちの御本家、大和の長谷寺の観音菩薩を

篤く信仰し、その御利益ごりやくのおかげで長者になった男の話です。

観音さんの夢のお告げを信じたからこそ、男は、ゴミに過ぎない藁のクズを拾って、その後の幸運に出会っていくわけです。まさに信じたからこそ救われたわけです。

### ★宗教とは何か

ところで、宗教はとりもなおさず信仰ですから、信じる人にとつては、神や仏はたしかにおわします。逆に信仰のない人にとつては、神も仏も、フィクションに過ぎません。宗教は理屈を超えた世界ですから、これはそういうものですよ。しかし言いようがありません。だってたら観音さん連れて来てみるといわれても困ります。

本来宗教は、それを求める人への必要なものです。誰にとつても、またいと、一生の間

つても必要なものではありません。

敬愛する宗教学者の言葉に、「仏教は心の病院」というのがあります。病院というのがあります。病人や怪我人が行く所。病気になる時怪我をしたときにだけ行く場所です。物理的な病気や怪我だけでなく、悩みや苦しきも病氣です。

「苦しい時の神だのみ」という言葉があります。どうしようもなくなつて、何かにすがりたくなるという経験は、誰にでもあります。この、すがりたくなる「何か」というのは、決して人ではありません。なにしろ「神だのみ」なんです。人の力ではどうしようもありません。神仏の力にすがろうとするわけです。

そう考えると、

に一度も病院やお医者さんの世話にならない人がいないように、宗教や信仰を生涯で一度も必要としない人は、いないことになりません。

健康管理も病院の仕事です。心身の健康を保つために信仰を持つこともまた、正しいあり方だといえます。

### ★菩薩はおわすか

さて、信じる人にとっては菩薩はおわしますが、そうでない人にはいいわけですか。いなくてもいいわけですか。なにしろ信じてないのですから、いてもいなくても意味はありません。考えてもみて下さい。キ

リスト教やイスラムを信仰していない多くの日本人にとっては、イエスやアラーは無縁の存在です。いてもいなくても関係ありません。ですから以下は余計なお世話なのですが、まあ坊主の端くれとしては、やはり書いておかなきゃなりません。

信仰など必要ない、自分は無宗教だという人たちも、目には見えない力の中で、あるいは力のおかげで生きています。一方で、悟りをひらくためとまでいわずとも、修行を続けている人はいくらでもいます。それに、苦しみで満たされたこの世界に生きていること自体、修行ともいえます。自ら名乗ることがなくても、自ら意識することがなくても、そういう人たちは菩薩です。

観音さんのように慈愛に満ちた人はいますね。困った時に優しく手を差し伸べてくれる人も。でも、人はさまざまな表情を合わせ持つ存在ですから、そういう人でも、時には夜叉や鬼になることだってあります。それでも人は誰もが、どこかで、何らかの形で、方法で、人さまや世間の役に立ちたいと願っています。また、あなたに直接救いの手を差し伸べようとする人たちだけでなく、巡り巡ってあなたを救うことになる存在となると、これは無数にいます。

例えば、見知らぬ誰かがあなたの友だちを救ったその友だちがあなたを救うことに繋がっているかもしれない。あるいはあなたを救うその友だちを生み育てたご両親もまた、あなたを救う存在といえます。しかし、そういう人々の



小倉遊亀「観世音」フワッと浮いています

# 高野山通信

すべてに助けを求めることも、あるいは感謝の気持ちも、伝えることも、できるはずはありません。会うこともない、存在さえ知らない人は、いくらでもいるわけですから。

そういう人々の、願いや思いの総体を、菩薩と考えてみてはどうでしょう。だからたとえば観音さんなら、多くの顔を持ち、手や目を持っていると考えられたのではないのでしょうか。

そういう意味では、観音さんはとても分かりやすいですね。観音さんが、十一面観音や千手観音のように、多くの顔や手を持つのは、そういうことの表れなのではないかと思えます。もっとも、そんなことは、人間の作り出す社会的諸関係の問題なのだから、感謝云々の話ではないといわれらるなら、その通りと言うしかありませんけれど。

## ◆高野山開創1200年

2011年の春から始めた四国遍路は、昨秋、讃岐の最後の6か寺を打ち終えて、無事結願いたしました。山の中で雨にたたられたことも一度ならずありましたが、結願の日は見事な秋晴れが祝福してくれました。

この4月には、お礼参りで高野山に登り、高野山開創法要にも参列します。

というわけで今年高野山は、開創1200年の大きな節目を迎え、それを記念する法要が盛大に営まれます。

ちなみに、今年<sup>2015</sup>年が開創1200年とされるのは、弘法大師が嵯峨天皇から高野の地を賜ったのが、弘仁7年(816年)のことだったから。1200年目という計算ですね。

開創といえば、すでに諸堂や寺の体制が完成しているのだろうと思われるかも知れませんが、決してそういうわけではありません。当時高野の

地にあつたのは、地主神を祀る祠程度のもものではなかったかと考えられています。下賜の勅許後、大師は弟子たちを高野に向かわせ、開墾と整備に着手しました。

いわば、この年を起点に高野での寺造りが始まったわけで、高野山ではこれを開創としています。諸堂の立ち並ぶ山上伽藍に佇むと、伽藍整備の苦勞が偲ばれるような気がします。

法要は、4月17・18日の両日。1泊2日の参拝です。今回の四国遍路に参加されなかった方でもご参加いただけます。詳しくは、お問い合わせください。

## ◆毘沙門堂屋根葺き替え

去年の日本列島は、近年にないほど幾度かの大きな台風に見舞われました。被害に遭われた檀家さんも少なくないと思います。お見舞い申し上げます。

寺では毘沙門堂の瓦が落ちました。このところ頻繁に瓦が落ちるので、大工さんや



毘沙門堂の瓦 見事にずれていきます

◆カンパと切手  
カンパの報告がしばらく滞っていました。申し訳ありません。  
濱武捷さん、柚友フジコさん、福井幹代さん、米本茂雄さん、中内輝彦さんからカンパ、高橋千代子さん、桑野美恵さんから切手が届きました。ありがとうございました。

## ◆父を看取る

大法会を控えた11月半ば、郷里の父を見送りました。

直前まで元気に暮らしていましたが、入院して10日余りで旅立ちました。昨暮の曾孫の誕生には間に合いませんでした。満89歳。私の生家は神道ですから、父は「熊谷安美大人命」という名の神になりました。

瓦屋さんに点検してもらったところ、瓦は全体的にかなりずれ、屋根裏も傷んでいることが判明しました。このまま放っておくと、いずれ雨が漏り、そうなると大修理が必要になってしまいます。修繕するならいまがチャンスと言われ、そういうことなら、屋根の葺き替えを決意しました。

節分を終えてからの工事になります。庫裏の改築を終え、しばらくは工事もないだろうと思っていました。が、そういうわけにもいかないようです。寺は、建物のメンテナンスだけでも容易なことではありません。

〒772-0004  
鳴門市撫養町木津 1037-1  
電話 088-686-2450  
ファクス 088-686-2130  
E-Mail cho\_kuma@mwb.biglobe.ne.jp  
URL http://www.chokokuji.jp/

新行 長行 編集 祐信